【報告要旨】

毛沢東思想学習班の記録
——ある中学生の日記を読む——

近畿大学　平坂仁志

中国各地の露店で毛沢東語録や毛沢東バッジなどの文革時期の品物が売られているのをよく見かけるが、最近売り物の中に、文革当時市井の人々が記した日記やノートを目にするようになってきた。ある露店の店主によれば、こういったものは元来紙くずであり、少し前まではゴミ同然のものであったが、ここ数年来、文革期の資料としての価値が見いだされ、かなり高額で売れるようになってきたとのことである。

今回、報告者が手に入れた記録の中から、文革中期のある中学生の毛沢東思想学習日記を紹介したい。昨年（1998年）6月、知人が雲南省を訪れた際、150元で「紅衛兵日記」を購入した。日記には1970年1月13日から2月25日まで、同年6月26日から8月31日まで、そして1972年2月23日から4月4日、4月24日、6月21日の出来事が記されている。他にも毛沢東の最高指示や詩、歌、共産主義青年団入団申請書などが書かれており、終ページに筆者のプロフィールがある（こういった日記やノートで筆者がはっきりしているものは大変珍しい）。筆者は呂向紅という1955年9月1日生まれの昆明師範学院附属中学の女子学生で、家族構成や出身階級なども記されている。さらに、本人のものではない大人が書いたと思われる筆跡で筆者へのメッセージが記されており、おそらく誰かに読まれることを前提に書かれたものであると思われる。

日記には日頃の学習活動の記録、野営活動のこと、工場勤務のことなどがたどたどしい（例えば、一文中に同じ接続詞を何度も用いたり）文章で書かれ、毎回毛語録を引用しながらそれに基づいて批判、反省、「闘私批修」を行ったことが綴られている。そしてその日の出来事に照らし合わせて毛語録を引用し、こじつけに近い形で「自分の悪いところを反省し、毛主席の教えにならい、毛主席のすぐれた戦士となり、人民に奉仕し、革命を遂行しよう」と結ばれるパターンがほとんどである。当時の中学生が毛沢東思想に否応なしに呪縛されている様子が垣間見える。当時、筆者が本当に毛沢東思想を礼賛し、それに心酔していたかどうか確かめるすべはないが、いずれにしても文革期における思想教育の強い全体主義性が窺える。

近年、多くの人々が文化大革命について書いているが、どれも成人後に当時を回想するという形をとっており、文革を批判、反省する視点から語られている。この日記には、一人の普通の少女が時代の奔流の中で過ごしたありのままが描かれており、文化大革命という一種異常な状況を、断片的ではあるが、同時代的な視点で見ることができる。こうした意味で、この日記は大変興味深い史料であると言えよう。